

# 長期キャンプ体験が参加児童の情動知能に与える影響

伊達 彩加 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)  
指導教員 中野 友博

キーワード：長期キャンプ体験，参加児童，情動知能

## 1. 緒言

現代社会において核家族化や意思疎通のデジタル化により，本来あるはずのコミュニケーションの場の減少に伴い，若者のコミュニケーション能力も低下する傾向にある．そこで近年，キャンプ活動を通して子どもの頃から社会的スキルを発達させ，社会環境に適応するための情動知能を育む研究が進んでいる．

本研究は，長期キャンプ体験が参加児童の情動知能に与える影響を明らかにすることを目的とする．そこで，以下の仮説を設定した．

仮説 1: 情動知能はキャンプ前後で向上する．

仮説 2: 情動知能のすべての領域で向上する．

仮説 3: メインプログラム前後の情動知能に向上がみられる．

## 2. 研究方法

【対象者】2016年8月15日～8月23日にNPO法人F森の学校が主催する奄美ネイチャーキャンプの参加児童16名を対象者とした．

【調査用紙】

1) 児童用情動知能尺度：皆川らが開発した3領域12因子36項目から成る児童用情動知能尺度を筆者が独自に修正したアンケートを使用し，5件法で回答を求めた．これをキャンプ前(pre1)，メインプログラム前(pre2)，メインプログラム後(post1)，キャンプ後(post2)の計4回実施した．

2) 振り返りシート：キャンプ中の情動知能の変化に及ぼした内的動向を掴むものとして筆者が独自に作成した自由記述式用紙を用いた．これをキャンプ中毎晩実施した．

## 3. 結果と考察

参加児童の情動知能得点変化を調査時期ごとにみるため児童用情動知能尺度得点の平均値を領域別に算出し，Friedman検定を行った(表1)．

表1 児童用情動知能の平均点及び標準偏差

	M(SD)				$\chi^2$
	n=16	pre1	pre2	post1	
全体得点	76.94(30.11)	87.25(23.72)	95.06(27.33)	97.63(30.08)	13.318*
自己対応	27.25(9.56)	29.06(9.77)	34.25(7.89)	36.31(8.02)	16.154*
対人対応	26.44(12.62)	29.94(9.06)	30.44(11.45)	30.94(11.96)	4.519 n.s.
状況対応	23.25(10.43)	28.25(8.35)	30.38(10.52)	30.38(11.82)	3.714 n.s.

\*:p<0.5

1) 情動知能全体得点においてpre1-post1とpre1-post2で有意に向上した．これは，長期キャンプ体験が参加児童の情動知能に影響を与え，

キャンプ中維持されていたことを明らかにしたと考える．

また，pre1-post1で有意に向上していることから，メインプログラムが参加児童の情動知能に影響したと考えられる．

2) 自己対応領域で，pre1-post1にかけて有意な向上がみられた要因として，その間のプログラムや活動が関係しており，振り返りシートの1番協力した活動は何かの回答に，スノーケリングとカヤックに集中していたことから，出来ないことへの挑戦や，練習を重ね出来たときの達成感が有意な向上に繋がったと考える．また，pre2-post1のシーカヤックツアーでは，豪雨に見舞われ進行に困難をきたしたため，仲間たちと協力するようなプログラムではなく，どう乗り越えるかを自分で考えて実行しなければいけない環境下であったこと，達成できた喜びが個人の自己対応領域に大きく影響したと考える．

3) 対人対応領域と状況対応領域においては，本調査時のキャンプ中の児童の様子とプログラムの進行が有意な向上に繋がらなかったことが要因と考える．また，振り返りシートの回答から，参加児童が協力したと認識してプログラムを行っていても，必ずしも情動知能に有意な向上がでるとは限らないと考えられる．

## 4. まとめ

本研究では以下のことが明らかになった．

- 1) 長期キャンプ前後で参加児童の情動知能は有意に向上したことから，仮説1は支持された．
- 2) 情動知能の領域別では，自己対応領域のみ有意な向上があった．対人対応領域と状況対応領域においては，有意な向上はみられなかった．このことから仮説2は一部支持された．
- 3) メインプログラム前後で，参加児童の情動知能は有意に向上した．また，領域別にみた結果，自己対応領域に有意な向上がみられたことから，仮説3は支持された．

## 引用文献

- 1) 皆川直凡，片瀬力丸，大竹恵子，島井哲志(2010)児童用情動知能尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討，鳴門教育大学研究紀要，第25巻，pp31-37